

シェイクスピア劇とローマ史の人物像

——プルタルコスを中心に——

(IX)

『コリオレーナス』論（その三）

コリオレーナスの性格

木 村 輝 平

コリオレーナス なぜ、こんな狼よろしくの衣裳でここに
立たねばならぬのだ。通りがかりの有象無象から
余計なご賛成をいただくためか？

（2 幕 3 場122～124行）

(I)

『コリオレーナス』における主人公コリオレーナスは直情経行型の人間の典型で、その性格もきわめて単純明快、見るべき内面はあまり持たないというような印象をともしるとわれわれに与えがちである。しかし、じっさいには、彼の性格はそうした見方で足りるほど平板で簡単なものではない。よく検討してみれば、コリオレーナスにも彼固有の心理的（あるいは心理学的）な特徴、もしくは偏り、がいくつかあり、それらがあいまって、彼をひとつの立派な個性に仕上げているのだということがわかるのである。それ故、今回はコリオレー

ナスの性格を明らかにするについて、それらをいくつかの特徴に分けて、順次各章で論ずることにしたい。その際、プルタルコスによる伝記との比較を基調にすることはいつものとおりである。

まず、彼の特徴の第一は怒りっぽさ、短気さ、あるいは気性の激しさである。じっさい、この劇は彼の怒りっぽさを示す言葉で満ち満ちていると言っても過言ではない。『コリオレーナス』においては、この性質は彼の生まれつき、天性と判断されるが、これについて重要なのは、書いたシェイクスピアも、また観客の側も、コリオレーナスを当時流行していた人間の類型論に沿って、胆汁質タイプの人間 (choleric man) として捉えていたのではないかと思われる点である。よく知られているように、人間の気質は古代、中世よりルネッサンスに受け継がれた四体液の生理・心理学説により、陽気な「多血質」、短気な「胆汁質」、陰気な（神経質な）「黒胆汁質」、平気な（鈍感な）「粘液質」の4タイプに分類されてきた。胆汁質については、もう少しくわしい考え方から言えば、これに相応する性質は「怒り」の他に、「復讐心」、「性急さ」、「大胆」、「高慢」などが挙げられ、さらに、体形的にはやせて、黄色の顔色であることなどが考えられたようである。

さて、この胆汁質の概念とコリオレーナスとの結びつきは直感的にはかなり強そうに思えるのだが、それでは、その根拠はということになるとこれを示すことはなかなか難しい。結局のところ、もっとも有力な「証拠」としてはコリオレーナスの先天的と思われる怒りの激しさと、四体液の生理・心理説が一般に広く流布し、文学作品にもよく言及、利用されていたというシェイクスピアの時代の文化的背景ということになる。彼の激しい気性が遺伝的なものと考えられるのは、まさにその並はずれた激しさの故であるが、彼の母ボラムニアも幼い息子もやはり、同じ気性であることが劇中に表わされていることも客観的な根拠となろう¹⁾。

ボラムニア 喉をとるのは怒りだけ。それで、
 食べれば食べるほどやせるのです。
 さあ、行きましょう。メソメソするのは止めて、
 私のように、ジュノーの怒りで悲しむのです。さあ、さあ。

(4幕2場49～52行)

バレリア ……私はあの子が派手な色の蝶を追っているところを見ました。あの子はそれを捕えては放し、捕えては放し、何度もしていましたが、やがて、転んだせいか、何かに腹を立て、その蝶に噛みつき、喰いちぎってしまいました。それはもう激しい仕方です。

(1幕3場65～71行)

この他にコリオレーナスを胆汁質と結びつける要因としては、彼への言及の言葉の中に、何度か“choler”(怒り・胆汁)という語を使用している点で、当時の環境では聞く者に自然に胆汁質の概念を触発したのではないと思われる。また、先に挙げた胆汁質人間の「怒り」以外のいくつかの特質もコリオレーナスにはほとんどあてはまるようだが、ただ、こうした二次的特徴をシェイクスピアにせよ観客にせよ、どれほど意識していたかということは疑問が残るように思える。むしろ、これらの特徴は彼の物語自体に内在するもの、ということ、コレオラヌスという人物自体がそうしたタイプの人間として元来有していたのではないと思われる。

次に、「コレオラヌス伝」では主人公と胆汁質の気質との関係はどう捉えられているかを見てみたい。まずわかることは、コレオラヌスが怒りっぽく、傲岸な人物であるということは数回にわたって言及があり、その際“choler”とか“choleric”という語も使用されているので、ノース訳がシェイクスピアの劇において、怒り易い、胆汁質のコリオレーナス像の出発点になっているということである。しかし、その言及部分を読んでも、プルタルコスがこの人物を胆汁質と結びつけていたかどうかはあまり自信が持てなくなる。たとえば、たしかに彼が短気で、激しい気性であることは述べてあるが、そのような性質

を教育の欠如の結果として繰り返して説明しているところがあり（第1節および第15節）、この書き方からは彼が気質の類型論に注目していたようにはとも思われない。また、ノース訳で使用されている“choler”とか“choleric”の言葉にしても、綿密に読んでみると、それらが彼の生まれつきの気質類型に言及しているとはっきり判断できるところはほとんどない²⁾。もちろん、歴史的には、プルタルコスの際にはヒポクラテス以来、古代の哲学者たちによって四体液説による人間の類型論は展開されていたはずだが、『対比列伝』の中ではこうした考えにまず、お目にかからないし、プルタルコスのもうひとつの著作、『倫理論集』（*Moralia*）などでも、筆者の見限りでは、出てこないようである。結局、この四気質論の一般への普及にはルネッサンス頃とプルタルコスの時代ではかなり差異があり、それがプルタルコスとシェイクスピアの間に、上に述べたような相違を作り出しているということかも知れない。

シェイクスピアの劇ではこの四気質、とりわけ黒胆汁質と関連すると見られる人物は少なくはなく、面白い問題であるが、ここではそれに触れる余裕はないので、コリオレーナスの怒りについての筆者の感想を述べてこの章を終えることにしたい。この劇で、彼の怒り、または怒りっぽさは常に彼に理性的対応を不可能にし、それが彼の政治的失脚の重要な原因となったのは明らかである。ところが、彼にとって非常に大きなこのマイナス要因は、他方、彼の最大の長所の原動力でもあるという気が筆者にはするのである。その長所というのは、言うまでもなく、彼の超人的な勇敢さと戦闘力のことである。筆者の印象からすると、彼の超人的強さはじつは彼の単細胞的で、ほとんど狂的な「怒り」の有り様と同じ源から、あるいは同一のエネルギー源から、来ているように思われるのである。そして、この印象が肯定される限りにおいて、コリオレーナスという人物がいかに極端な人物であれ、ひとつの劇の主人公として十分機能し得るものと感じられるのである。とまれ、『コリオレーナス』という劇ほど制御不可能な生理的エネルギーの故に英雄ともなり、また、運命の破綻者ともな

った人間の姿を痛切に描いたものはないのではなからうか。

(Ⅱ)

Martius. Thanks. What's the matter, you dissentious rogues,
That, rubbing the poor itch of your opinion,
Make yourselves scabs?

(1.1.168-170)

マーシャス ありがとう。何だというのだ不平分子めらが、
つまらぬ不満のムズムズががまんできず、
かき回し専門のかさぶた野郎になりたいのか。

これはコリオレーナスのはじめての登場の際に民衆に向かって言う彼のせりふであるが、この中にこの劇での彼の民衆に対する態度が端的に象徴されていると言ってもよい。すなわち、彼は政治的に民衆に敵対しているばかりでなく彼らを心底見下し、軽蔑しているのである。彼は何分にも直情的な性格であるから、つねに心中の軽蔑心を隠すことはなかったし、それを偽って、民衆とうまく妥協できるはずもなかった。したがって、こうした態度がコリオレーナスの破滅の原因ともなったと言えるのだが、それではなぜ、彼はかくも民衆に侮蔑的であるのだろうか。それには一応、いくつかの理由は考え得る。もちろん、まず第一に、彼が貴族の名門の出であるということがある。また、前回述べたように、民衆の側は無責任、軽佻浮薄などの欠点があり、それが正義の士を任ずるコリオレーナスにはがまんがならないということもあろう。さらに、彼のように私欲に恬淡とした勇士にとって、戦争の時は逃げ腰で、平時には権利要求にうるさいと思える平民には腹立たしくてたまらなかったかも知れない。

しかし、この劇に接した限りで、これらのどれにも勝って重要な要因と感じられるのはコリオレーナスの「高慢」という性分である。実際、このことは彼

の侮蔑の矢面に立った護民官たちの言葉がはっきりと物語っている。

シシニアス このマーシャスほど高慢な男はいただろうか。

ブルータス いや、いない。

シシニアス われわれが護民官に選ばれた時——

ブルータス あの唇と眼を見たか。

シシニアス それどころか、あの嘲りよう。

(1 幕 1 場256～259行)

また、平民たちも彼が高慢な男で、戦争で大殊勲を立てるのも、実はそれを誇らしげにしたいがためという動機があるのだとしている（1 幕 1 場33～34行、39～40行）。母親でさえも、彼が民衆をうまく扱えない原因を彼の高慢にあると考えて、「好きなようにしなさい。おまえの勇氣は私の乳から吸い取ったものだが、その高慢は私ゆずりのものではありません」と言うこともある（3 幕 2 場128～130行）。この劇では以上の例に限らず、コリオレーナスに関して、“pride” とか “proud” とかの言葉が比較的多く使われており、コリオレーナスに高慢という性質が与えられていたことは間違いない。そして、これを「怒りっぽさ」に次ぐコリオレーナスの性格の第二の特徴と考えてよいだろう。

今度は、その高慢ということでプルタルコスを参照してどうなっているかを見てみると、ノースの訳の中にはシェイクスピアが参考にしたと覚しき所は2箇所ほどある。そのひとつは第1節で、それによれば、彼は剛毅、堅忍というような美点の故に大いに尊敬されたが、人には親しまれなかったという。なぜなら、「彼の態度にはある種の横柄できびしいところがあり、それが人々にはえらく威張っているように見え、不快に思われた」からである。またもうひとつの、第18節では、彼が民会に弁明のため出席した時のことについて次のように述べられている。

しかし、民衆がへり下った、けんそんな言葉を彼から聞くつもりでいたところ、彼はいつもの無遠慮な話し方——それは荒っぽく、不快なもので、彼の潔白をもたらすよりは告発をより深刻にする体のものだったが、——をし始めたばかりではなく、ま

るで事態を無視しているかのように、威嚇的な顔つきや調子を示した。

こうして見ると、プルタルコスに書かれている事と、シェイクスピア劇での扱いとはかなり似ているところもあるが、ある種の差異も明らかに存在することがわかる。この差異は結局のところ、「高慢」という概念の有無ということになろう。この劇に限らず、「高慢」という概念の多いのはシェイクスピア劇の特徴と言えるかも知れない。ところで、前章にすでに述べたように、高慢という性質も胆汁質の気質の一部とされるので、その関係でコリオレーナスに高慢さを与えられているとも考えることはできる。たしかに、その可能性は否定できないが、ただシェイクスピアの他の作品との比較で考えると、その可能性は大きいとは思えず、やはり、シェイクスピア劇での「高慢」は、キリスト教会の七つの大罪のひとつとしての「高慢」との関連を考えるのが適当と思われる。ともあれ、この問題もプルタルコスとシェイクスピアとの時代背景、文化背景の相違が感じられるところであろう。

ところで、コリオレーナスの発する民衆への侮蔑の言葉の中で筆者には少し気になる部分がある。それは民衆の身体的、あるいは生理的不潔さに言及したせりふである。もちろん、そうしたせりふも彼の平民への感情からすると不自然ではないのだが、ややくどいくらい多い点がひっかかるのである。それらを下に示す。

奴らに顔を洗って、

歯を磨くようにさせろ。

(2幕3場67～68行)

あの移り気で、悪臭ふんぶんの集団……

(3幕1場66行)

あいつらの息ときたら、

腐った沼の臭いみたいにぞっとする……

(3幕3場120～121行)

これらはコリオレーナスの言葉であるが、彼の友で民衆の信望が厚いはずのメネアスの言葉にも次のようなものがある。

職人たちの声、ニンニクぶんぶんの
連中の言葉、こうしたものにあぐらをかいた
〔護民官の〕お前たち……。
(4幕6場96～98行)

お前たちの臭くて汚い帽子……
(4幕6場133行)

こうしたせりふをしゃべる人物のその時々^{その時々}の心理ということはさておき、これだけ似た趣旨のことが繰り返されれば、それは強い印象を聞く者に与えることは確かである。そして、前回指摘したようにこの劇で民衆というものがかなり辛辣な描かれ方をしているという背景で考えると、これらの言葉は民衆に対して何らかの冷たさ^{冷たさ}を含んでいるように感じられる。もちろん、シェイクスピアは『真夏の夜の夢』の職人たちの場合などのように、一般庶民を理解し、愛情をもって描くことができた。しかしながら、筆者の受ける印象としては、シェイクスピアは根本的には貴族主義的であり、特に政治面ではそれははっきりしているように思う。それがこういうこととも微妙に関連している気がする。

このことに関して興味深いのは、当時の劇場で観客のかかなりの部分を占めたに相違ない大衆、庶民がこれをどう受け止めたかということ、あるいは逆に、作者シェイクスピアの観客認識はどのようなものだったかということである。因みに、『コリオレーナス』はシェイクスピアの同時代には上演の記録はないのだが、かと言って、これが貴族のため特別書かれたものとする根拠はまったくなく、やはり、劇場用のものではなかったかと思われる。

さて、締めくくりに、誇り高きが故に他人に低姿勢をとることを知らなかったコリオレーナスが、一時的にせよ変った可能性が示されるところがこの劇に

はあるので、それに触れておきたい。それは次のようなせりふに表われている。

オーフィディウス

……

そこまで取り立てられておきながら、あいつは
お世辞をうまく回りに振りまいて、
私の友人たちをたぶらかしだしたのだ。

いままでは、粗野で勝手気ままそのものだった、
その男が己れの性分を曲げてまで。

(5幕6場22～26行)

これはオーフィディウスが配下の者にコリオレーナス暗殺を唆かす時の言葉なので、これにどれほどの真実性があると考えたらよいのか、判断に迷うところである。この辺がシェイクスピア劇の常に難しいところだが、それでも、このせりふがある限りコリオレーナスが社交的な人間にと態度を変えた可能性は観客には顧慮されるわけであり、たぶん、そこが大事なところだと思われる。というのは、それがあある程度でも真実とするなら、それは彼もたいへんな苦勞をしたことを実感させる事柄であるし、また、なによりも、人間性というものをきわめてよく物語るものでもあるからである。

(Ⅲ)

コリオレーナスの没落の第一歩は彼が執政官の候補になりながら、民衆の支持をとりつけることができず、執政官になり損ったところにある。その原因にはすでに述べたような彼の怒りっぽい性格、民衆への蔑視、高すぎるプライドなどの要素が挙げられるが、その他に、もうひとつ面白い心理のあやが絡んでいることも見逃せない。

執政官職については、当初は、それがコリオレーナスにころがり込んで来そうな情勢であった。元老院は彼を執政官にすることを喜んで決定し、あとは平

民の承認を受けるだけとなっていたのだから（2幕2場136～139行）。しかし、それについてはローマの習慣があって、候補者は自分の体に残った戦場の傷を見せて、平民に支持を求めなければならなかった³⁾。ところが、コリオレーナスはこれを嫌がり、平民たちに会っても傷を見せそうにしながらも、はぐらかし、実際には見せずにごまかしてしまう。これは最後にバレてしまい、平民のコリオレーナス不信を増幅させる結果になるが、もし素直にこの習慣に従っていたら、いくら護民官の煽動があっても、彼を執政官にしないわけにはいかなかったろうと思われる。それでは、なぜ彼は民衆に傷を見せたくなかったのか。もちろん、それには彼の民衆への嫌悪と軽蔑、それに彼の自尊心が作用していたことは間違いない。しかし、この劇ではそれらに加えてもうひとつ別の要素も考慮すべきであると思われる。-というのは、コリオレーナスは傷のこのみならず、戦争での手柄についても人前で——貴族・平民を問わず——それを誉められることを極端に嫌うということがあるからである。

そうした場面は何度も見られるが、面白いのは拒絶するにあたって、時には自ら戦争での手柄の象徴として刀傷のことを持ち出し、そして、それへの賞讃を拒否するという表現が使われていることである。

私の体に少々傷が残っておりますが、
それに言葉が触れると痛みが走ります。

（1幕9場28～29行）

私の刀傷を誉められるくらいなら、
いっそ元通りに治ってしまった方がましです。

（2幕2場72～74行）

これらは明らかに後のエピソードへの伏線となっているが、いずれにせよ、コリオレーナスが選挙で傷を見せ渋った理由と人に戦功を賞讃されるのを苦手とした理由には共通するところがあると考えてよい。それでは、どうして彼は自

分の功績が人に賞められるのを嫌うのか⁴⁾。ふつう考えられるのは、彼が性格的に照れ屋、あるいは恥ずかしがり屋なのではないかということと、信条的に彼が極端な潔癖家なのではないかという二つの要因である。コリオレーナスの場合はどちらも当たっている気がするが、自己の欲望抑制には厳しく、その意味ではストイックな性格からして特に後者が大きく関係しているのではないかと筆者には思われる。コリオレーナスの考えからすれば、戦場での働きは国家のための無償の義務であって、手柄や刀傷にその対価を期待するなどというのは卑しむべきことだったに違いない。ともあれ、結果として、コリオレーナスは世間並みの考え方に歩み寄ることはできず、傷を見せることをせず、失敗したのだった。

ところで、この件に関してプルタルコス述べていることはどうかということ記述は2箇所にあつてはいるが、重要なのは次に掲げる箇所である(第15節)⁵⁾。

Now Martius, following this custome, shewed many woundes and cutes upon his bodie, which he receyved in seventeene years service at the warres and in many sundrie battels being ever the foremost man that dyd set out feete to fight. So that there was not a man among the people but was ashamed of himself to refuse so valiant a man

さて、マルティウスはこの習慣に従い、過去17年間、軍隊の先頭に立って数々の戦闘で戦い、身に受けた多くの傷痕を示した。そこで、民衆の誰一人としてこれほどの勇士を拒もうとしたことを恥じないものはなかった……。

というように、プルタルコスによればコリオラヌスは自分の傷を民衆に見せ、彼らに強い感銘を与えているのである。したがって、主人公が傷を見せることが嫌だったという部分は完全にシェイクスピアの創作なのである。(因みにプルタルコスではコリオラヌスが執政官になれなくなったのは、先回述べたように、まったく別の理由からである⁶⁾。)このことに関する限り、コリオレーナスと同類の人物として、筆者は『リア王』のコーディリアを思い出さないわけに

はいかない。なぜなら、彼女も独得の潔癖さから些細なことにこだわり過ぎて、不幸と悲劇を招いてしまったと考えられるからである。俗人の目からすれば、二人の心は義し過ぎて、それ故ひねくれているという共通性を持つことになる。

さて、この傷を見せることに関して、この劇には解釈に問題があるところが1箇所あるので、それを検討してこの章の締めくくりとしたい。

Coriolanus.

Why in this *wolvish toge* should I stand here,
To beg of Hob and Dick that do appear,
Their needless vouches?

(2. 3. 122-124, イタリックは筆者)

コリオレーナス なぜ、こんな狼よろしくの衣裳でここに
立たねばならぬのだ。通りがかりの有象無象から
余計なご賛成をいただくためか？

これは、いよいよコリオレーナスが謙虚を表わす粗末な外衣 (a gown of humility) を着用し、出会う民衆に戦傷を示して、その支持を要請しなければならなくなった場面でのせりふである。この中で “wolvish toge” の箇所が解釈に困難があり、編注者の頭を悩ませるところなのである。

まず、“toge”であるが、これは元の第一・二折本では “tongue” となっていたのを、マローン (Malone) が校訂したものだが、同様の誤りは他の作品にも例があり⁷⁾、この校訂はまず、間違いのないものと考えてよい。もちろん、“toge” は「トガ」(toga) の意である。残りの語は、第一・二折本では “woolvish” となっていたのだが、スティーブンズ (Steevens) がそれを異綴形として、本来の “wolvish” に校訂したものである。この “wolvish” の解釈が問題なのだが、これはこのままで考えれば、“wolfish” (狼の) という語の古形ということになる。しかし、それだけではこの語句の意味はあまりはつきりしない。そこで、この語に対する考え方はおよそ次のような二つがある。

ひとつは、元の形に戻って、これを“wool”の形容詞形と見る考え方で、ニュー・シェイクスピア版のウィルソン（Dover Wilson）などは“woolvish”は“wooliish”（＝woolyish）の間違いである可能性を示唆している。ウールの服と言えば、手織りのものがシェイクスピアの時代には庶民の愛用するところであって、粗末な衣服の代名詞のように考えられていたようである。じっさい、『コリオレーナス』でも“wollen vassals”（「毛織り服の下郎ども」）（3幕2場9行）という表現があるが、これは粗衣の民衆を罵った言葉である。これに対してもうひとつの解釈の方は、“woolvish”をやはり“wolfish”の意味に取り、その場合、狼を寓話に出てくる羊の皮をかぶった狼のことと考えるのである。そうすると、コリオレーナスが着ていた粗末なトガは民衆を欺く羊の皮ということになる。この二つの解釈にはそれぞれ一長一短あり、簡単には優劣を決め難い。前者の方は解釈にはさほど苦しさはないが、語形の上では無理が感じられる。（“wooliish”であったとしても、まだ、不自然な語の用い方と言えよう。）後者の場合は逆に、語形に問題はないが、表現と解釈の間に飛躍が大きいように感じられる。結局、比較すれば前者の方が無理が大きいということであろうか、大部分の編者は後者を採用しているようである。筆者も後者に軍配を上げたいと思うが、これはたんに選択だけの問題ではなく、十分な注釈が必要なところと思われる。

まず、ここを理解する上で重要なポイントは、コリオレーナスはこの場面でトガの下にほとんど衣類を付けておらず、裸であることだ。これは2幕2場で彼が「裸の体にトガを着て、我身の傷故にどうかご支持を私に、などとはとても言えぬ」（140～142行）というせりふがあることから明らかである。したがって、シェイクスピアの頭の中では——そして、観客にとっても——、コリオレーナスがそのトガを着るイメージと狼が羊の皮をかぶるイメージとは、かなり重なりやすくなっていると考えられるのである。もちろん、このトガの着方のことはプルタルコスから来ているが、それを述べた箇所というのが、先に傷を

見せる件についての出典で引用し残した部分に相当する（第14節）。ここは長くなるので全訳は省略し、ノース訳の原文のみをまず掲げる⁸⁾。（イタリックは筆者）

For the custome of Rome was at that time, that suche as dyd sue for any office, should for certen dayes before be in the market place, *only with a poore gowne on their backes, and without any coate underneath, to praye the citizens to remember them at the daye of election*: which was thus devised, either to move the people the more, by requesting them in suche meane apparell, or els bicause they might shewe them their woundes they had gotten in the warres in the service of the common wealth, as manifest markes and testimonie of their valliantnes. Now it is not to be thought that *the suters went thus lose in a simple gowne in the market place, without any coate under it*, for feare, and suspition of the common people: for offices of dignitie in the citie were not then geven by favour or corruption.

前半のイタリック部分は、「粗末な外衣のみを背に羽織り、その下には衣類を着けず⁹⁾、自分への投票を依頼した」というような意味であり、また後半のそれは、「候補者たちは下には何の着衣もなしに、簡素な外衣一枚をふわりとまわって広場に出た」という意味である。ここで「外衣」というのは、もちろん、トガのことを実際には指している。これで、シェイクスピアの劇で裸の上にトガを着るという設定の根拠がはっきりするわけだが、上のイタリック部分にはよく注意してみると、もうひとつ重要なポイントが隠されていることもわかる。すなわち、それは、トガの着方も“lose” (loose)、すなわち、フワフワしたゆるい仕方であったようだということである。とすると、“on their backes”, すなわち、「背に羽織って」というのも、同じことを指す重要な表現であるように考えられる。これ以上のことはノース訳からはわからないが、アミヨにさかのぼるとははっきりとした解答が見つかる。すなわち、問題部分はそれぞれ、“...ayant seulement une robe simple sur eux, sans saye dessous...”と

“...en robe simple tous déceints, et sans saye dessous...”となっている¹⁰⁾。この中の“tous déceints”という言葉から、候補者は帯の類いを締めずにトガを着ていたことが判明する。これが、ノース訳には上のような形に反映されていたということになる。とは言っても、もちろん、ここまではシェイクスピアの預り知らぬところであろう。だが、シェイクスピアがノースの“lose”とか“on their backs”という表現にも注意を十分向けていたとすると、よりいっそう羊の皮を背に乗せた狼のイメージが思いつき易かったと思われる。

(Ⅳ)

コリオレーナスの性格、あるいは心理に関してもうひとつの重要な特徴は彼と母親との関係である。劇を見れば誰しも気付くことであるが、コリオレーナスは母ボラムニアに特別の愛着を持っており、彼女はいまだに彼に大きな影響力となっている。もちろん、このことは、この劇のクライマックスにおいて、ボルスキー側に身を置いたコリオレーナスがローマ側の誰の説得にも耳を貸さなかったのに、最後に彼の家族に会い、母親の言葉に心を動かされ翻意するという過程に端的にあらわれている。その他にも、彼自身は気が進まなかったのに執政官就任を目指すようになったのは、母の希望のせいらしいし（2幕1場214～218行）、一度怒らせてしまった民衆のところにいよいよ頭を下げて、なだめに行くことになったのも彼女の圧力のせいである。その時、彼は冗談か本気か、とにかく「もう叱らないで下さい」（Chide me no more. 3・2・132）という言葉を使っているのは象徴的である。また、彼が「はじめて兵士になったのも、母の私の賞賛を得たいがため」（3幕2場108行）であり、戦争で大活躍したのも「ひとつには母を喜ばすため」（1幕1場38～39行）と他から評されている。

以上のような関係は、たんに親子の情愛とか、孝心の枠組の中ですべて考え

てしまうことも不可能ではないが、現代人のわれわれにはどうしてもフロイト的意味合いをそこに見ざるを得ない気がする。だから、コリオレーナスはある程度英語で言う、“Mother’s boy”（母親がかりの息子）的存在であり、いわゆる「マザー・コンプレックス」を持っていると言え言えよう。ただし、これはシェイクスピアがあまり明確に表現するところではなく、強調しすぎると嘘になるというようなかなり微妙な問題ではある。

実はこのような母子関係の描写も、ご多聞にもれず、プルタルコス「コリオラヌス伝」の記述を出発点にしている。それによると、まず、彼は早くから父を失い、母親の手で育てられたのだと言う（第1節）。また、彼は若くして勇名をとどろかせたが、彼が武勇によって次々と名誉を求めた動機は母親の喜ぶ様が見たいからであった（第4節）。

というのは、母親が自分を皆が賞賛するの聞き、冠を授けられて凱旋する自分の姿を見て、喜びのあまり涙を流しながら自分を抱きしめてくれることほど幸福で名誉なことはないと彼は考えていたのである。

ここまで母親への息子の強い感情が述べられていると、当然われわれとしてはフロイト的な無意識下の引力を意識してしまう。ところが、次に続く文章を見ると、これがまったく拍子抜けなのである。

その気持はエパミノンドスも告白したことがある。つまり、レウクトラにおける彼の勝利を父も母も生きていて見てくれたことを自分の最大の幸福と考えたというのである。エパミノンドスは幸い両親が生きていて、彼の喜びと成功と共に楽しむことができた。しかしマルティウス〔コリオラヌス〕は生きていたら父にすべきこともすべて母に尽くさなくては行けないと考え、彼女を喜ばせ、敬うだけでは足らず、その意に叶った人を妻とし、2人の子供をもうけたが、その後も母の家を出ることはなかった。

このようにエパミノンドスのケースと同列に並べる書き方をされては、コリオラヌスはたんに親孝行な息子ということでしかなくなってしまう。そして、父

親がいない分、倍増して母親に尽くしただけということになる。しかしこの辺りはあきらかにフロイト出現以前の人間による心理洞察の限界が感じられるところであって、現代人からすると、もどかしい気がしてならない。じっさいにはコリオラヌスと母の間にはフロイトの言う無意識下の性的様相は存在したと思われるし、プルタルコスとてそうしたものをある程度「感じ」はしていたらう。しかし、フロイト的視点を持たない悲しさで、理屈としてはそれを「親孝行」の範疇に入れざるを得ず、その典型と考えたということであろう。

「コリオラヌス伝」で、この他に両者の関係について言及らしい言及があるのは母親がボルスキーの陣営にコリオレーナスの説得に行った時のことだけである。その記述の始まり部分は次のようになっている。

さて、マルティウスは將軍にふさわしい威儀を正して高座にすわっていた。女たちが遠くからやって来るのを見ると何事かと驚いたが、彼の妻が先頭になって来るのを知るとはじめは、彼の頑なな憎悪を押し通そうとした。しかし、結局は自然の愛情に負け、会う決心をすると、今度は彼らを待ち切れず、急いで下にかけて下りた。そしてまず母親に口づけして、長い間抱きしめ、次に妻と小さな子供にそうした。(第34節)

上の「彼の妻が先頭になって来るのを知ると云々」というところは、誤解を招きやすいが、実は、アミョ・ノースの版以外ではふつう「妻」の代りに「母」となっており、たぶんそれがプルタルコスの真意ではなかったと思われるので、別に、彼は妻だから特別無視しようとしたという意味ではなさそうである。それはともかくとして、ここでは彼がまっ先に駆け寄ったのは母に対してであり、この点にもまた、彼の母親への執着の強さが表われていると言えよう。ところが、これは、シェイクスピア劇においては、事情はかなり違ったものになっているのである。

『コリオレーナス』(5幕3場)では、まず妻のバージリアが彼に呼びかけ、コリオレーナスははじめは躊躇するものの、結局は自然の情に流されて妻を抱きしめ口づけする。母にあいさつするのはその後のことであって、シェイクス

ピアは明らかに夫婦愛の方を優先させた格好になっている。このことから判断すると——また、他の箇所の利用の具合いから言っても——たぶん、次のように言えるであろう。すなわち、シェイクスピアは母親と息子の特別に親密な結び付きというモチーフをプルタルコスから受け継いでいるが、あまり強くは意識しておらず、特にフロイトの様相を明確に感じていたわけでもないのだと。それ故、この劇でいわゆるマザー・コンプレックスの要素はないことはないが、あまり強調するのも行き過ぎとなるのである。フロイト的ということ言えば、むしろ『ハムレット』の方が、その筋立ての点からも、エディパス・コンプレックスの要素が色濃く漂っていると思われる。

この問題でプルタルコスとシェイクスピアを比べてみて、印象深いのは妻バーギリアの存在感である。彼女はプルタルコスではほんの少し名前が言及されるだけの、いわば顔のない存在であるが、シェイクスピア劇では一人の個性ある人格になっている。すなわち、バーギリアは控え目で、概して口も重い方だが、心はやさしく、深い愛情に満ちた人柄である。そして、この性格はコリオレーナスの母ボラムニアの気が強く、野心的で自己主張の激しい性格とはまったく好対照をなしている。私見ではバーギリアの性格の中にふたたび、『リア王』のコーディリアの影を見ることは的はずれとも言えないようである。

(1986年9月 完)

注

- 1) ボラムニアの激しい気性を示す箇所は引用以外にも少くない。
- 2) たとえば、追放が決定したコリオラヌスの描写において、“the choleric man”という、一見決定的と思える語が使われているが（第21節）、これもよく読むと、じつは、「怒った人は」という一般論を述べているに過ぎないことがわかる。
- 3) 後に引用するように、プルタルコスの記述にはこれが本当にそういう習慣であったかどうかには多少疑問を持たせる書き方があるが、シェイクスピア劇ではとにかくそういう設定になっている。
- 4) 2章で触れたように、コリオレーナスは自分の力、勲功を心中では誇りとし、鼻に

かけるところがあるようだが、それとこのことは必ずしも矛盾するものではない。

- 5) 引用は *The Tudor Translations* シリーズ中, *North's Plutarch* Vol. II, p. 159 より。
- 6) 『英文学評論』, 第51集, p. 65参照。
- 7) *Othello*, 1. 1. 25.
- 8) 前掲書, p. 158 より。
- 9) 「衣類」とした語はノースの訳では“coate”となっているが、次余に示すように、アミヨでは“saye”であり、これはむしろ“tunic”のことで、古代ギリシャ、ローマで下着に用いられた長胴着を指すものと思われる。
- 10) *Plutarch: Les vies des hommes illustres*, tome I (Bibliothèque de la Pléiade), p. 486 より。これは綴りは現代化してあるが、語そのものは元の文章に忠実である。